

# 雪靈續記

泉鏡花

青空文庫





から酒さへ飲んだのでありますが、酔ひもしなければ、心も定らないのであります。唯一夜、徒らに、思出の武生の町に宿つても構はない。が、宿りつゝ、其處に虎杖の里を彼方に視て、心も足も運べない時の儂さには尚ほ堪へられまい、と思ひなやんで居ますうちに――

汽車は着きました。

目をつむつて、耳を壓へて、發車を待つのが、三分、五分、十分十五分――やゝ三十分過ぎて、やがて、驛員に其の不通の通達を聞いた時は！

雪が其まゝの待女郎に成つて、手を取つて導くやうで、まんじ巴の中空を渡る橋は、宛然に玉の棧橋かと思はれました。

人間は増長します。――積雪のために汽車が留つて難儀をすると言へば――旅籠は取らないで、すぐにお米さんの許へ、然うだ、行つて行けなさうな事はない、が、しかし……と、そんな事を思つて、早や壁も天井も雪の空のやうに成つた停車場に、しばらく考へて居ましたが、餘り不躑だと己を制して、矢張り一旦は宿に着く事にしましたのです。ですから、同列車の乗客の中で、停車場を離れたのは、多分私が一番あとだつたらうと思ひます。

大雪です。

「雪やこんこ、

霰やこんこ。」

大雪です——が、停車場前の茶店では、まだ小兒たちの、そんな聲が聞えて居ました。其の時は、山の根笹を吹くやうに、風もさらくと鳴りましたつけ。町へ入るまでに日もとつぷりと暮果てますと、

「爺さいのウ婆さいのウ、

綿雪小雪が降るわいのウ、

雨戸も小窓もしめさつし。」

と寂しい侘しい唄の聲——雪も、小兒が爺婆に化けました。——風も次第に、ぐわうぐわうと樹ながら山を揺りました。

みせや店屋さへ最う戸が閉る。……旅籠屋も門を閉しました。

家名も何も構はず、いま其家も閉めようとする一軒の旅籠屋へ駈込みましたのですから、場所は町の目貫の向へは遠いけれど、鎮守の方へは近かつたのです。

座敷は二階で、だゞつ広い、人氣の少ないさみしい家で、夕餉もさびしうございました。

若狹わかさがれひ——大だいすきですが、其それが附木つけぎのやうに凍こほつて居ゐます——白子魚乾しらすぼし、切干大根きりほしだいこんの酢す、椀わんはまた白子魚乾しらすぼしに、とろゝ昆布こぶの吸すひもの——しかし、何なんとなく可なつかし懐なみだくつて涙なみだぐまるゝやうでした、何故なぜですか。……

酒さけも呼よんだが酔よひません。むかしの事ことを考かんがへると、病びやう苦くを救すくはれたお米よねさんに對たいして、生なま意まい氣きらしく恥はづかしい。

兩手りやうてを炬燵こたつにさして、俯向うつむいて居ゐました、濡ぬれるやうに涙なみだがでます。

さつと言いふ吹雪ふぶきであります。さつと吹ふくあとを、ぐわうーと鳴なる。……次第しだいに家いへごと揺ゆるほどに成なりましたのに、何なんと言いふ寂さび寞しきだか、あの、ひっそりと障子しやうじの鳴なる音おと。カタ／＼カタ、白しろい魔まが忍しのんで來くる、雪入道ゆきにふだうが透すき見みする。カタ／＼／＼カタ、さーツ、さーツ、ぐわう／＼と吹ふくなかに——見みる／＼うちに障子しやうじの棧さんがパツ／＼と白しろく成なります、

雨戸あまどの隙すきへ鳥とりの嘴くちばしほど、程ほど吹込ふきこむ雪ゆきです。

「大雪おほゆきの降ふる夜よなど、町まちの路みちが絶たえますと、三日みっかも四日よっかも私わたし一人ひとり——」  
三年ねんいぜん以前いぜんに逢あつた時とき、……お米よねさんが言いつたのです。

「路みちの絶たえる。大雪おほゆきの夜よ。」

お米よねさんが、あの虎杖いたどりの里さとの、此この吹雪ふぶきに……

「……唯一たゞひとり人。」——

私は決然けつぜんとして、身みごしらへをしたのであります。

「電報でんぱうを——」

と言いつて、旅宿りよしゆくを出でました。

實じつはなくなりました父ちちが、其その危篤きとくの時とき、東京とうきやうから歸かへりますのに、(タダイマココマデキマシタ)と此この町まちから發信はつしんした……偶ふとそれを口實こうじつに——時間じかんは遅おそくはありませんが、目口めくちもあかない、此この吹雪ふぶきに、何なんと言いつて外そとへ出でようと、放火つけびか強盜がうたう、人ひと殺ころに疑うたがはれはしまいかと危あやぶむまでに、さんざん思おもひ惑まどつたあとです。

ころ柿がきのやうな髪かみを結ゆつた霜しもげた女ぢやうぢう中ちゆうが、雑炊ざふすいでもするのでせう——土間どまで大釜おほがまの下したを焚たいて居ゐました。番頭ばんとうは帳場ちやうばに青い顔あををして居ゐました。が、無論むろん、自分じぶんたちが其その使つかひに出でようとは怪我けがにも言いはないのであります。

「何う成るのだらう……とにかくこれは尋常事ぢやない。」

私は幾度となく雪に轉び、風に倒れながら思つたのであります。

「天狗の爲す業だ、——魔の業だ。」

何しろ可恐い大な手が、白い指紋の大渦を巻いて居るのだと思ひました。

いのちとりの吹雪の中に——

最後に倒れたのは一つの雪の丘です。——然うは言つても、小高い場所に雪が積つたの

ではありません、粉雪の吹溜りがこんもりと積つたのを、哄と吹く風が根こそぎに其の

吹く方へ吹飛ばして運ぶのであります。一つ二つの數ではない。波の重るやうな、幾つも

幾つも、颯と吹いて、むら／＼と位置を亂して、八方へ高く成ります。

私は最う、それまでに、幾度も其の渦にくる／＼と巻かれて、大な水の輪に、子子

蟲が引くりかへるやうな形で、取つては投げられ、掴んでは倒され、捲き上げては倒さ

れました。

私は——白晝、北海の荒波の上で起る處の此の吹雪の渦を見た事があります。——

一度は、たとへば、敦賀灣でありました——繪にかいた雨龍のぐる／＼と輪を巻

いて、一條、ゆつたりと尾を下に垂れたやうな形のもものが、降りしきり、吹煽つて空



中に薄黒い列を造ります。

見て居るうちに、其の一つが、ぽつと消えるかと思ふと、忽ち、ぽつと、續いて同じ形が顯れます。消えるのではない、幽に見える若狭の岬へ矢の如く白く成つて飛ぶのです。ひとつひとつが皆な然うでした。——吹雪の渦は湧いては飛び、湧いては飛びます。

私の耳を打ち、鼻を振ぢつゝ、いま、其の渦が乗つては飛び、掠めては走らんです。

大波に漂ふ小舟は、宙天に揺上らるゝ時は、唯波ばかり、白き黒き雲の一片をも見ず、奈落に揉落さるゝ時は、海底の巖の根なる藻の、紅き碧きをさへ見ると言ひます。

風の一息死ぬ、眞空の一瞬時には、町も、屋根も、軒下の流も、其の屋根を壓して果しなく十重二十重に高く聳ち、遙に連る雪の山脈も、旅籠の炬燵も、釜も、釜の下なる火も、果は虎杖の家、お米さんの薄色の袖、紫陽花、紫の花も……お米さんの素足さへ、きつぱりと見えました。が、脈を打つて吹雪が來ると、呼吸は咽んで、目は盲のやうに成るのでありました。

最早、最後かと思ふ時に、鎮守の社が目の前にあることに心着いたのであります。同時に峰の尖つたやうな眞白な杉の大木を見ました。

雪難之碑のある處——

天狗——魔の手など意識しましたのは、其の樹のせみかも知れません。たゞし此に目標が出来たためか、背に根が生えたやうに成つて、倒れて居る雪の丘の飛移るやうな思ひはなくなりました。

海は、兩側にまだ家のありました頃は、——中に旅籠も交つて居ます——一面識

はなくつても、同じ汽車に乗つた人たちが、疎にも、それ／＼の二階に籠つて居るらし

い、其れこそ親友が附添つて居るやうに、氣丈夫に頼母しかつたのであります。尤も

其を心あてに、頼む。——助けて——助けて——と幾度か呼びました。けれども、窓一

つ、ちらりと燈火の影の漏れて答ふる光もありませんでした。聞える筈もありますまい。

いまは、唯お米さんと、間に千尺の雪を隔つるのみで、一人死を待つ、……寧ろ目

を瞑るばかりに成りました。

時に不思議なものを見ました——底なき雪の大空の、尚ほ其の上を、プスリと鑿で穿

つて其の穴から落ちこぼれる……大きさは然うです……蠟燭の灯の少し大いほどな眞

蒼な光が、ちらくと雪を染め、染めて、ちらくと染めながら、ツツと輝いて、其の

古杉の梢に来て留りました。其の青い火は、しかし私の魂が最う藻脱けて、虚空へ飛ん

で、倒さかに下さの亡骸なきがらを覗のぞいたのかも知しれません。

が、其その影かげが映さすと、半なかば埋うもれた私わたしの身からだ體たは、ぱつと紫陽花あぢさゐに包つまれたやうに、青あをく、

藍あゐに、群ぐんじやう青あゐに成なりました。

此この山やまの上うへなる峠たうげの茶屋ちややを思おもひ出だす——極暑ごくしよ、病氣びやうきのため、俵くるまで越こえて、故郷こきやうへ歸かへる道みちすがら、其その茶屋ちややで休やすんだ時ときの事ことです。門もんも背戸せども紫陽花あぢさゐで包つまれて居ゐました。——私わたしの顔かほの色いろも同おなじだつたらうと思おもふ、手ても青あをい。

何なにより、嫌いやな、可おそろ恐ろい雷かみなりが鳴なつたのです。たゞさへ破われようとする心しんぞう臟ぞうに、動悸どうきは、破障子やれしやうじの煽あふるやうで、震ふるへる手てに飲のむ水みづの、水みづより前さきに無むすう數ずの蚊かが、目め、口くち、鼻はなへ飛とび込こんだのであります。

其その時ときの苦くるしさ。——今いまも。

## 三

白しろい梢こずゑの青あをい火ひは、また中なか空ぞらの渦うづを映うつし出だす——とぐろを巻まき、尾をを垂たれて、海原うなばらのそれおなと同じおなです。いや、それおなよりも、峠たうげで屋根やねに近ちかかつた、あおの可おそろ恐ろい雲くもの峰みねに宛そつく

然なりであります。

此この上うへ、雷かみなり。

大おほ雷かみなりは雪ゆき國くにの、こんな時ときに起おこります。

死し力りよくを籠こめて、起おき上あがらうとすると、其その渦うづが、風かぜで、ぐわうと巻まいて、捲まきながら亂みだるゝと見みれば、計はかり知しられぬ高たかさから颯さつと大おほ瀧だきを揺ゆり落おとすやうに、泡あわ沫わとも、しづきとも、粉こなとも、灰はひとも、針はりとも分わかず、降ふり埋うづめる。

「あつ。」

私わたしは又また倒たふれました。

怪あやし火びに映うつる、其その大おほ瀧だきの雪ゆきは、目めの前まへなる、ツツンと重おもい、大おほきやまいたゞきひとなだだれに落おちて來くるやうにも見みえました。

引ひ挫つがれた。

苦く痛つうの顔かほの、醜みにくさを隠かくさうと、裏うらも表おもても同おなじ雪ゆきの、厚あつく、重おもい、外ぐわ套いたうの袖そでを被かぶると、また青あをい火ひの影かげに、紫あぢ陽さあ花はなの花はなに包つくまれますやうで、且かつ白しろ羽は二ふた重への裏うらに薄うす萌も黄えぎがすつと透とほるやうでした。

ウオ、、、！

俄然として耳を嚙んだのは、凄く可恐い、且つ力ある犬の聲でありました。

ウオ、、、！

虎の嘯くとよりは、龍の吟ずるが如き、凄烈悲壯な聲であります。

ウオ、、、！

三聲を續けて鳴いたと思ふと……雪をかついだ、太く逞しい、しかし瘦せた、一頭の和犬、むく犬の、耳の青竹をそいだやうに立つたのが、吹雪の瀧を、上の峰から、一直線に飛下りた如く思はれます。忽ち私の傍を、近々と横ぎつて、左右に雪の白泡を、ぎつと蹴立てて、恰も水雷艇の荒浪を切るが如く猛然として進みます。

あと、ものの一町ばかりは、眞白な一條の路が開けました。——雪の渦が十ヲばかりぐるぐると續いて行く。……

此を反對にすると、虎杖の方へ行くのであります。

犬の其の進む方は、まるで違つた道でありました。が、私は夢中で、其のあとに續いたのであります。

路は一面、渺々と白い野原に成りました。

が、大犬の勢は衰へません。——勿論、行くあとにく道が開けます。渦が續いて

行く……

野の中空を、雪の翼を縫つて、あの青い火が、蜿々と螢のやうに飛んで來ました。  
眞正面に、凹字形の大きな建ものが、眞白な大軍艦のやうに朦朧として顯れました。と見ると、怪し火は、何と、ツツツと尾を曳きつゝ。先へ斜に飛んで、其の屋根の高い棟なる避雷針の尖端に、ぱつと留つて、ちらちらと青く輝きます。

ウオ、ウオ、

鐵づくりの門の柱の、やがて平地と同じに埋まつた眞中を、犬は山を乗るやうに入ります。私は坂を越すやうに續きました。

ドンと鳴つて、犬の頭突きに、扉が開いた。

餘りの嬉しさに、雪に一度手を支へて、鎮守の方を遙拜しつゝ、建ものの、戸を入りました。

學校——中學校です。

唯、犬は廊下を、何處へ行つたか分かりません。

途端に……

ざつくと、あの續いた渦が、一ツづゝ數萬の蛾の群つたやうな、一人の人の形にな

つて、縦隊一列に入つて來ました。雪で束ねたやうですが、いづれも演習行軍の装して、眞先なのは刀を取つて、ぴたりと胸にあてて居る。それが長靴を高く踏んでづかりと入る。あとから、背囊、荷銃したのを、一隊十七人まで數へました。うろつく者には、傍目も觸らず、肅然として廊下を長く打つて、通つて、廣い講堂が、青白く映つて開く、其處へ堂々と入つたのです。

「休め——」

……と聲する。

私は雪籠りの許を受けようとして、たどくと近づきましたが、扉のしまつた中の様子、硝子窓越に、ふと見て茫然と立ちました。

眞中の卓子を圍んで、入亂れつゝ椅子に掛けて、背囊も解かず、銃を引つけたまゝ、大皿に裝つた、握飯、赤飯、煮染をてん／＼に取つて居ます。頭を振り、足ぶみをするのなぞ見えませんが、聲は籠つて聞えません。

——わあ——

と罵るか、笑ふか、一つ大聲が響いたと思ふと、あの長靴なのが、つかくと進んで、半月形の講壇に上つて、ツと身を一方に開くと、一人、眞すぐに進んで、正

面の黒板へ白墨を手にして、何事をか記すのです、——勿論、武装のまゝでありました。

何にも、黒板へ顯れません。

續いて一人、また同じ事をしました。

が、何にも黒板へ顯れません。

十六人が十六人、同じやうなことをした。最後に、肩と頭と一團に成つたと思ふと——

其の隊長と思ふのが、衝と面を背けました時——苛つやうに、自棄のやうに、てん

／＼に、一齊に白墨を投げました。雪が群つて散るやうです。

「氣をつけ。」

つゝと驚が片翼を長く開いたやうに、壇をかけて列が整ふ。

「右向け、右——前へ！」

入口が背後にあるか、……吸はるゝやうに消えました。

と思ふと、忽然として、顯れて、むくと躍つて、卓子の真中へ高く乗つた。雪を

拂へば咽喉白くして、茶の斑なる、畑將軍の宛然犬獅子……

ウオ、ウ、ウ、！



肩を聳て、前脚をスクと立てて、耳が其の圓天井へ届くかとして、嚇と大口を開けて、まがみは遠く黒板に呼吸を吐いた——

黒板は一面眞白な雪に變りました。

此の猛犬は、——土地ではまだ、深山にかくれて生きて居る事を信ぜられて居ます——雪の中行軍に擬して、中の河内を柳ヶ瀬へ抜けようとした冒險に、教授が二人、某中學生が十五人、無慙にも凍死をしたのでした。——七年前——

雪難之碑は其の記念ださうであります。

——其の時、豫て校庭に養はれて、嚮導に立つた犬の、恥ぢて自ら殺したとも言ひ、然らずと言ふのが——こゝに顯れたのであります。

一行が遭難の日は、學校に例として、食饌を備へるさうです。丁度其の夜に當つたのです。が、同じ月、同じ夜の其の命日は、月が晴れても、附近の町は、宵から戸を閉ぢるさうです、眞白な十七人が縦横に町を通るからだと言ひます——後で此を聞きました。

私は眠るやうに、學校の廊下に倒れて居ました。

翌早朝、小使部屋の爐の焚火に救はれて蘇生つたのであります。が、いづれにも、

然<sup>しか</sup>も、中<sup>なか</sup>にも恐<sup>きよう</sup>縮<sup>しゆく</sup>をしましたのは、汽<sup>き</sup>車<sup>しゃ</sup>の厄<sup>やく</sup>に逢<sup>あ</sup>つた一人<sup>にん</sup>として、驛<sup>えき</sup>員<sup>めん</sup>、殊<sup>こと</sup>に驛<sup>えき</sup>ちや  
長<sup>ちやう</sup>さんの御<sup>お</sup>立<sup>たち</sup>會<sup>あひ</sup>に成<sup>な</sup>つた事<sup>こと</sup>でありました。

# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十一」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日第1刷発行

1975（昭和50）年7月2日第2刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 雪靈續記

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>